

# みんなのデジタルリポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## スモモの文化史

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2013-02-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池谷, 和信 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/4816">http://hdl.handle.net/10502/4816</a>

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

## スモモの

### 文化史

池谷和信

スモモ（李）は中国が原産地であるが、現在では温帯から亜熱帯にかけて栽培されており、果汁の多い果実が食用にされる。同時に東南アジアの大陸部では市場などで売られている。モモに比べて酸味が強いことが名称の由来である。

スモモは、春に白い花を咲かせる。この美しさのためか、わが国ではすでに『万葉集』のなかに登場することが知られている。大伴家持は、「わが園のすももの花か庭に降るはだれのいまだ残りたるかも」という歌を詠んでいる。これは、スモモの白い花が庭で散っているのか、春の雪が残っているのかわかる、という思いを示しており、万葉の時代の光景が浮かんでくる。

現在、東京都府中市の大國魂神社では、毎年7月20日にスモモをお供え物の一つにする「すもも祭」が行われ、スモモの露店が開かれる。

Obkunitama-jinja



大國魂神社では、毎年「すもも祭」が行われる。